
死にたがりと見習い魔導士

三俣優哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死にたがりと見習い魔導士

【NNコード】

N3845W

【作者名】

三俣優哉

【あらすじ】

「魔導士試験」それは二年に一度、大陸連盟によつて行われる第一級の資格試験。

魔導士であつた父に憧れる私、ミリア・セレナルはお父さんのような魔導士を目指し、交易の水都カーレントで行われる魔導士試験を受けにきました！

結果は……、え？ 二次試験？ 観察期間？

死にたがりの魔法使いと魔導士見習いの少女。二人と周りの人々
が送る、時々シリアスなファンタジー！

プロローグ（前書き）

一回目の連載です。お気に入りや、感想と評価をしてくれると嬉しいです。

プロローグ

呼吸をする事。鼓動を刻む事。笑う事。悲しむ事。人が生きるという事。

もしも、与えられたそれに意味があると言つのなら、俺が生きる意味はきっと

この生命を消す事だ。

プロローグ

不安な夜、夢に見るのは、いつか見た優しい夕暮れ時の事。

遙か彼方に見える空と地平を彩り、それを見つめる人達をも朱い色彩が覆う頃。

夜の帳が緩やかに、終劇を告げる天幕のように落ちる時間。

幼い私は、街外れの小高い丘の上で、一枚の絵画のようなそれを見つめていた。

描かれているのは雑然とした街並み。

街の煙突から立ち上る煙は、夕飯の合図。子供も達の別れの挨拶は明日を約束しているのだらう。

私は昔から夕暮れ時が　特に日が沈む間際、朱が一番綺麗に見える瞬間が好きだった。冬の大気の中でも見る朱はどんな宝石よりも輝いて見えたのを良く覚えている。

だから夢の中の私は　約束の通り　、名前も知らない大きな木に腰掛け、今日という舞台の幕が下りるのを見つめているのだろう。

私はぼんやりと夕陽を見続ける、風が吹き抜け髪をなびかせ、…幼い私は、不意に気付いた。いや、最初から知っていたのかもしない。

これは誰にも知られぬ観劇だと。

演じる者のいない舞台を、ただ一人の観客が見つめるだけ。美術品を眺めるのと同じ、綺麗なモノを瞳に写すだけの行為だと。

そう、確かに綺麗なのだ。光が、大気が、大地が、世界が織りなす景色に、文句のつけようなんて無い。しかし、何かが足りなかつた、……ひどく寂しくて、景色が色褪せてしまっているような気がした。

涙が零れそうになり、私は目を閉じた。

ああ、そつか、一人で見る夕暮れは優しい色をしていないんだ。家族の声がして、友達が其処に居て、はじめて暖かいんだ。

砂は落ち、日が天秤のように傾き沈む。舞台はクライマックスだ。一度とは巡つてこない今日の幕引き。

夜と言つ名の幕が落ち、朱が強くなる瞬間　誰かの手が、私の頭を滅茶苦茶に撫でた。

私は目を見開き、唐突なそれを見上げる。大きな手で、ゴシゴシとした不器用な手の平で、私の頭を撫でる人がいる。

私と同じ真っ黒な髪をしていて、好奇心に満ち溢れた蒼い瞳で私を見て笑いかける人だ。

魔導士の証である黒い外套を風になびかせ、自信満々に其処に立つている人。

レディを何時まで待たせる気なの！

普通は先に来て待つているものでしょ！

もう日が沈んじゃうじゃない！

頭に浮かんだ沢山の文句。それを一つ残らず言つてやるつって、そう思つたのに……、結局失敗する。

「お父さんー！」

「おつと……」

心配した自分に腹が立つて、でも来てくれた事が嬉しくて、私はお父さんに思いつ切り抱き付く。うん、今回はコレでおあいこにしてあげる　誰にも聞こえない言い訳は必死の照れ隠し。

「待たせちまつたな」

お父さんは私に抱き付かれたまま、優しく髪を撫でてくれる。私

が泣いてる時は、いつもそうやつてあやしてくれた。だから、思い出して少しだけ涙ぐむ。

「うん。すいー、すんーー、遅かった……」

「うう……。そのだな、ルニア……、仕事にな、時間を、取られてだな……。」

お父さんは泣き声うな私の言葉を聞くと、まづが悪ひに嘘うつ詰を始める。

お父さんは昔から嘘が下手だから、すぐに動搖しちゃって、言葉が途切れ途切れになつてしまつ。嘘を吐けないんだから正直に言えば良いのに。少し格好悪い。

次々と嘘、もとい言い詰を並べるお父さん。
やう言えば、お父さんが嘘を吐く時の癖に気付いたのは、私がもう少し小さい頃、一度誕生日の日だった。

最初に暴いたのはプレゼントを秘密にしていたお父さんの嘘。次はケーキの嘘。あの時は得意になつて、お父さんの嘘を次々と暴いて、お母さんも呆れ顔をしてたつけて……。

ああ、やうだ、そんな事を思い出したから、

「お父さん……」

「の時、私は、

「ん……、何だ? ルニア」

お父さんに、飛びつきつの我が儘を言つたくなつたんだ。

「魔法が見たいの……、夕陽よりも綺麗な魔法を……」

風が吹いて、お父さんの髪と外套を揺らした。驚いたのか、呆れたのかは分からない、ただ、何かを堪えるように俯いて、肩を震わせた思つたら急に笑い出して……手を、振り上げた。

「ふつ……お安い御用だ！」

一番星が瞬いた。空間を光の軌跡が駆けた。夜が幕を下ろす。理が変革する。朱い光が最後の煌めきを放ち、空に華が咲き誇る。天蓋が七色に染まって、氷のように碎けて散つた。景色を塗り替えたのは刹那　　お父さんの魔法。

誕生日にくれた綺麗な魔法。

夢を見ている私が憧れた瞬間。

「……私も、なれるかな、お父さんみたいな格好良い魔導士に……」

「ああ、なれるさ！」

笑うお父さんを見て、私はゆっくりと天蓋を閉じた。

この想いを、一人で忘れてしまわないようじ。

目覚まし時計が鳴っている。それはもう、けたたましく鳴っている。

最近、割と真剣に買い替えを思案している、魔法動力を用いないムーブメント式の目覚まし時計は、起床時間を知らせる為に律儀にも金色のベルを打ち鳴らし続けている。

何というか、借金取りが押し掛けて来たみたいな大音声で。

……煩い。煩い事この上無い。

私は騒音から逃れるように寝返りを打つ。しかし、純白のカーテン越しに射す陽光も、私が起きるのを催促するように光を強める。目蓋に触れた光がスクリーンを白く染めた。……目眩がする程の光の氾濫。必死に抵抗してみるが、

「うう……、眩しい……」

十秒も保たない内に根負けした。朝の光の前には、眠気も全く意味を成さなかつたようだ。

私は敗残兵よろしくベッドから顔を出し、寝ぼけ眼で懐かしい夢と違和感を溶かす時計を注視する。しかし、見ただけ。私は耳障りなそれを『認識』するのに、酷く時間をかけている。

無自覚な抵抗。眠かったからじやなくて。単に理解したく無い。頭のどこかが警鐘を鳴らしていた。

だつて、知つたらきっと後悔する。

……それなのに、止めろという意思を理解しないまま、頭は勝手に短針と長針の位置を見定め、示す時間を見読み取つてしまつ。

時計が指し示すのは……、

「はえ……？ 十時、半……？」

眩いた一瞬の間の後、私は体にかかつっていた木綿のシーツを思いつきり跳ね飛ばした！ 冷たい汗が背中を伝つ。埃が一斉に舞い上がる。だけど、そんな事を気にしている場合じやない！

遅刻だ！ 遅刻以外何物でもない！？

私はとりあえず、鐘を黙らせる為に時計の頭を叩き、パニックに陥りながら思考回路を全力で回し始める。

えーっと……、そうだ！ まずは着替えをしなくては。私は足をもつれさせながら、ベッドの向かいに置かれたクローゼットを勢い良く開く。だけど中には服どころか、ハンガーも無い。

何故？ って、当たり前だ。此処は魔導士試験の為にとつたカーレントの宿で、起き抜けの違和感の正体は、自分の部屋じやないから。荷物は全部鞄の中で、着替えは昨日枕元に準備した筈だつた！

私は寝る前の行動を思い出して、慌ててベッドの方に戻る。しかし、まだ混乱していたのか、注意力が足りなさすぎたのか、鞄に手を伸ばそうとした辺りで、部屋の真ん中に置かれた木製の丸テーブルに体をぶつけた。

「つ……！」

鈍い音と共に衝撃が伝わり、テーブルの端に置かれていた魔法灯のランプが円を描くように揺れる。そのまま数回転、ランプは足を踏み外したかのように板張りの床にゆっくりと落下していく。

ランプが床の上で碎ける想像が浮かび、その想像に現実が追い付こうとして……、

「わあっ！？」

寸前で飛び込むようにランプを拾い上げた！

ま、間に合った……。右手を突き出し、左足を上げるという妙な姿勢をとりあえず正し、一旦氣を落ち着かせる。

うん、まず落ち着こう。何というか、さすがに慌てすぎていた。私はランプを机の上に戻すと、枕元に置まれていた衣服を手に取つて広げる。一つ一つの動作の緊張を取り払う。

ランプのドタバタのおかげか、割とすぐに落ち着く事が出来たのはある意味幸運だ。

「うん、落ち着いた」

自己暗示のように呟き、軽く深呼吸をしてから着替えを始める。寝間着に使つていた黄色のパジャマを脱ぎ捨て、買ったばかりの白いブラウスに袖を通す。

茶色のプリーツスカートを腰より少し高めの位置でベルトを通して固定。ベッドに座り、黒のソックスに足を入れた。

ブラウスに合わせた臙脂色えんじのネクタイをしっかりと締めて、白いラインが走る紺色の外套を羽織つて終わりだ。

「よしー。」

私は着替えが終わると、一呼吸を置く間もなく鞄と、枕元に置いてある紙を引つ付かんと、扉に向かって駆け出す。握り締めたのは、昨日何度も読み直した魔導士試験の受験票。

焦つてない、急いでるだけ。自分にそう言い聞かせ、扉を開いた。部屋の隅に置かれた姿見を、一瞬だけ視界に收める。見慣れた黒い髪に寝癖がついてない事を確認し、瞳にも眠気が無い事を確かめる。

……顔は洗つた方が良さそうだ。私はそれだけ確認すると、扉を閉めた。

一章・死にたがりと転落少女 1（後書き）

長い間投稿出来ませんでした、続きを気にして下さった方申し訳ありません。

これからもう一ついた事があるかも知れませんが、見守って下さる
と幸いです。

少し乱暴に閉められた扉の音を聞きながら廊下に出た。

「数日で随分見慣れた、黄金の秤亭の一階廊下だ。

高そうな毒や絵画が飾られているのと、掃除が行き届いている事による相乗効果なのだろう、どこか高級感が漂っている。だが、実際の宿賃は中の下程度の良心的な宿だ。

……だけど、私はその良心的な宿賃すらともに払えない。いや、仕方がなかつたんだよ！ 魔導士試験の受験料が馬鹿みたいに高いんだから！ それこそ今までの貯金を全額はたく位に。

うつ……、思い出すと何か泣けてくる。

何の感慨も無さそうに受付の手の内に消えていった貯金。悲しい事だった。でも、私は忘れない。

涙を拭つて前を向く。

まあ、そんな理由もあつて、宿の店主であり、母さんの友達でもあつたルリさんに頼みこみ、少しの雑用を手伝う事を条件に格安で泊めてもらつてしているのが、この黄金の秤亭なのだ。

因みに、私が借りている部屋（一番狭く人気が無い）はこの階の北側の端にあり、そこから間隔を開けて、隣に一部屋、向かいに二部屋で、客室は全部で六部屋ある。

階段は南側の端にあるので、私の部屋からは一番遠い。

私は半ば駆けるようにして廊下を抜け、木の階段を一段飛ばしで下る。自分でも騒がしいと思うけど、今は許して欲しい。私の人生がかかっていると言つても過言では無いのだ……！

「たあつー！」

最後に踊り場を蹴り、階段をまとめて飛びこす。一際大きな音をたて、酒場を兼業している一階に降り立つた。着地のショックで床が軋み、私は勢いを殺しきれず、またも姿勢を崩し前のめりになる。本日一度目のアンバランス。

「わつとと……！ はあ……セーフ」

やつぱり注意が足りてないのか、まだ寝ぼけてるのか。倒れなかつた安堵と、自分への呆れが混じつた溜め息を一つ漏らす。何かへこみそう……。

そんな事を考えた時、周囲のざわめきで我に返つた。

私は顔を上げ、とりあえず店内を見回した。幸い、自分を見る人間は居ない。

昼間だし、酒場にありがちな騒々しさは無いので、ルリさんの趣味である音盤レコードが書き消してくれたのかも知れない。

ルリさんの趣味の良さに感謝して、意識して静かに歩き出す。二階の廊下を駆けておいて……、いや、だからこそ、これ以上の迷惑をかける訳にはいかないのだ。

ふとした緊張感から、テーブルとテーブルの間隔の広さを意識する。窮屈な印象が無い、落ち着いた空気。もう少し窓が多ければカフェのような雰囲気になりそうだ。

席は……、早めのランチを取っている人も多いのだらう。六割が
た席が埋まっている。

と言つても、置かれているテーブルの数がそつ多く無いので、十
数人と言つたところだらうか？

そういうえば、観光客が多いと言つても、宿一本では厳しいとルリ
さんが前にこぼしていたつけ。

私はそんな事を考えながら、テーブルの間を抜け、カウンターの
奥で手際よく飲み物を作つているルリさんに声をかけた。

「おはよウリーガモス！ ルツセん！」

「うん？ ああ、おはよウリーコア」

ルリさんはゆっくりと顔を上げ、手に持つていた洋酒の瓶を置いた。

どこか眠たげな瞳と視線が合つ。

うん、何時見ても綺麗な人だ。仕事の邪魔にならないようにと束
ねられた色素の薄い髪。どこか惹かれる琥珀色の瞳、毎日忙しく働
いているとは思えない綺麗な肌。優しげな雰囲気は店内を満たす音
盤の音に良く似ていた。

「レで私のお母さんと同い年だから、信じられない。

「どうした、じつと見つめて？」

暫く見つめていると、怪訝そうにそう問われた。

「へ？ い、いえ、何時も綺麗だなって思いまして、特に意味は無

いですよ?」

やましい所は無いので、私は正直に答える。けど、何故かルミさんは腕を組み、顔をしかめた。

「む、ミコア……、昨日も言つたが、私は別に綺麗では無いぞ。卑下する氣はないが、この辺りだと月下亭の嫁の方がずっと綺麗だ」

呆れたように息を吐き、ルミさんはそう言つた。

月下亭といつ店は聞いた事が無かつたけど、ルミさんが綺麗だと言つてのなら嘘では無いのだらう。

「ルミさんが綺麗つて言つ人なら本当に綺麗なんでしょうね。でも、ルミさんが綺麗なのは変わらないですよ」

うん、本当の事だ。だつて、絶対の自信を持つて言えるんですか
ら。

「う……せつか、その……ありがと」

「いえいえ」

照れたように笑つてくれたルミさんに、私も笑顔を返した。

月下亭といつお店に少し興味が湧いた私は、話を続けようと、無意識に椅子に手を掛ける。同じ女性として、綺麗な人には当然憧れがあるので。

ん? って、あれ? 確か私は急いでたんじゃ無かつたっけ?

「ルミア、ここで朝食はどうするんだ？」

そうだ、急いでいた。魔導士試験の結果発表だ。大陸連盟に認められた公認資格、重要故に機密性が高く、その発表は決められた時間に個人が直接受け取らなくてはならない。規約にそう書いてある。

「もう少し待つてくれたら私が作るが……いや、ルミアはその前に顔を洗つてくるか？」

発表は確か、十一時十五分。そして現在時刻は十時五十分。魔導士協会まで全力疾走でギリギリといったところだらうか……。

「ルミア？ 聞いているか？」

「え？」

ルミさんの声で思考が途切れ、我に返った。
景色が色を取り戻し、同時に時間が無いといつ実感が染み渡つていいく。

「……って、ああ、すいません！ 食事は帰つたら貰うんで…」

「どうした？ 何を慌てている？」

私の態度に、ルミさんは再び怪訝そうな表情を浮かべながら腕を組んだ。

羨ましくなる何かがエプロンを持ち上げた気がする。
いや、見てる場合じゃないけど…

「本当に元気なさい！ とにかく遅刻するんです！」

私はそれだけの言葉を置き去りに、黄金の秤亭を飛び出した。
ルミさんには後で謝らなくちゃいけないし、掃除も何時もより
念入りにしないと……。

軽い罪悪感と今後の対応に頭を悩ませながら、私は交易の水都の
中へと駆け出した。

一章・死にたがりと転落少女 2（後書き）

あとがきまで見ててくれた方、感想や評価をしてくれると嬉しいです。

黄金の秤亭の扉を開くと、ウェルネ通りと呼ばれる商店街に出る。

水都カーレントの中でも特に賑やかな通りで、宿屋に酒場、商店と魔法屋が何軒も建ち並ぶ、人の往来が盛んな場所だ。カーレントの東側の街道に近いここは、隣国のフィルナシアから来た人間が多く宿を取り、露店を開いている為か、東側の文化色が少しだけ強い。大陸鉄道が一般に利用される前からの歴史が垣間見えるようでなかなかに興味深いものだ。

因みに、西側には同じくフェルネ通りと呼ばれる商店街があり、それぞれの通りの名前は双子の女神からきていくとかなんとか。

余談だけど、双子の女神の名前からとつているのに、二つの商店街の仲が異常に悪いのは結構有名な話だ。なんでも毎年、商店街戦争なんていう売上合戦が起きる位らしい。

さて、閑話休題。私はそんな益体も無い考えを捨て、ウェルネ通りを満たす人波を掻き分け前へと駆けていく。

色とりどりの看板や、露店に並ぶ珍しい品が風と一緒に流れる様は、目まぐるしく回る万華鏡のように思えた。

やがて、ウェルネ通りを抜けると、視界を覆う巨大な運河が見えてくる。文字通り、街の中心を走る大運河であり、貨物船が横に十は通れそうな広さを誇る。また、街中に走る水路の全てが此処から始まる事から『親』とも呼ばれる。カーレントの交通・交易の大動脈だ。

水面に光が反射して、雑踏の中だというのに、なんとなく清浄な空気が漂っている気がするのは、きっとと思い違いではない。

見惚れないように注意しながら、私は運河をなぞるように上流へと向かって走っていく。すると、運河を跨ぐ石橋が姿を見せた。多くのアーチに支えられたこの街の象徴リトア大橋。此処を渡れば『魔導士協会』はすぐの筈だ。

「よし、間に合ひそう。」

運河の上に立つ古い時計を見ながら呟く。

残り時間は後十分近く、寝坊しておいてなんだが十分間に合ひそうだ。

私は徐々に歩幅を小さくすると、橋に差し掛かった所で歩きに変えた。石畳を鳴らす音に合わせ、乱れた息を深呼吸で整える、すると大分余裕が出来た。

うん、改めて見なくとも、リトア大橋は相変わらずの壮観だ。対岸まで並び立つ街灯、美しい装飾を施された欄干、何よりこの大河を繋ぐ大きさ、初めて見たときはすごく感動したし、お父さんに近付けたんだって思うと嬉しくもあつたつけ。

そういうえば、屋台で買ったアイスも美味しかったな、確かあの辺りに出ていたはず……。

「おい待てっ！　早まるな！　」

「ん？」

思い出に浸りながら、数日前に屋台のあつた場所に目を向けると、そこでは喧噪を破るように、数人の男性が大声をあげていた。焦燥

と緊張が入り混じった空気が張り詰めているのが分かつた。

早まるな？ 一体何だろ？ 私はその言葉に軽い好奇心と共に不安を覚えた。

自分は急いでいるはずだ。分かつてはいる。それなのに何となく、本当に必然性のある理由も無く、心がそう訴えるというだけで、そこに行かなくてはいけない気がした。そうしないと後悔する気がした。

「うん、迷うくらいなら動け、だよね」

私はこれから行動を確かめるように小さく頷き、欄干の近くで輪のようになつている人の群れを抜けて中に入つていく。

「すいません、ちょっと通して下さい……！」

思つたより人の密度が高かつたようだ。外套と髪を何度も引つ掛けながら、ようやく輪を抜け出した。おまけに息苦しかつたから、たまつたものじやなかつた。

私は息を吐くと、乱れた髪と服を整えながら、そこで起きている事を確かめる為に視線を上げた。

其処には、一人の男性が欄干を乗り越え、気怠げに立つていた。体格は長身瘦躯、長い茶髪を引っ詰めたように纏め、見覚えのある黒い外套を羽織つている。背を向けている為顔は見えない。

ただ、澄み渡る空と大河にも、純白の欄干と活気溢れる喧噪にも溶け込まない雰囲気のせいなのか。時々吹く風が男性の体を危なげに揺らしている、そんな気がした。

それはまるで……。

(自殺をしようとしている?)

男性の様子を確かめ、不意に理解をした。怖い……、だけど!
もしそうなら絶対に止めなくちゃいけない。

田の前で落ちていく物を取り落とす位なら、それに納得する位なら。

(お父さんみたいな魔導士になんて、絶対になれやしない!)

私は拳を握り締め、目を見開く、そして覚悟を決めて歩を進めた
瞬間 輪の中の誰かが叫び声を上げた。

男性が欄干から手を離し、大河に身を投げ出そうとしていた。

自殺 集まっていた人達はこの人の行為を止めようと駆け出した。
た。当然私も。

「つ……！」

近付こうとして、歩を進めていたのが幸いした。期せずして得た
数歩分のアドバンテージ、これなら間に合う筈だ!

「風舞う加護を! 翻れ! 世界を縁取る約束よ! 力学操作・

増加 !」

近付こうとして、歩を進めていたのが幸いした。期せずして得た
数歩分のアドバンテージ、これなら間に合う筈だ!

「風舞う加護を! 翻れ! 世界を縁取る約束よ! 力学操作・

増加 !」

私は早口で呪文を唱え、それを胸ポケットから取り出した魔法演

サボー

トヨニット

算補助符へと込めると、周囲の誰よりも早く男性の下にたどり着き、外套の端を掴むと同時に魔法を解放する。もつ考える必要なんて無い、魔法に必要な計算は全て符に任せる。大雑把に過ぎるけど、今必要なのは誰かを救うという結果だ！

だから後は……、腕に意識を集中させ、思いつ切り引っ張り上げる！

「上がれええつつーーー！」

「え？ ぐがつ……！？」

男性の体が宙に上がり、欄干の『向こう側』に派手に叩きつけられる。すごく嫌な音がした、とてつもなく痛そうだ……。

でもまあ、無事ではないけど……、本当に良かった、生きてる。

緊張の糸が緩んでいくのが分かつた。周りに集まっていた人達も徐々に柔らかい表情を浮かべ始める。

私は口元を緩め、それを確認しながら 勢い良く欄干を『越えていた』。

一章・死にたがりと転落少女 3（後書き）

間が空いてしまって申し訳ないです。次は出来る限り早く投稿したい。
感想、評価を下さると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3845w/>

死にたがりと見習い魔導士

2011年12月24日12時52分発行